

予言の論考 「日本の自殺」 グループ1984年 著

1975年 文藝春秋2月号 掲載

2012年 3月号再掲載 「予言の書 日本の自殺」

2023年 1月号 佐伯啓思

「日本の自殺を読み直す」

「日本の自殺」 著者について

グループ1984年

ジョージ・オーウェルが1948年に書いた予言小説「1984年」から

グループ1984年とは

1 説 香山健一（学習院大教授）を中心として公文俊平（元東大教授）佐藤誠三郎（元東大教授）など20数名

2 説 香山健一 一人の執筆

香山健一は、60年安保闘争時の全学連委員長。1974年から学習院大教授。1979年大平内閣九つの政策研究会のうち「田園都市国家構想研究会」「家庭基盤の充実研究会」の幹事、中曽根内閣の「日中友好21世紀研究会」「臨時教育審議会」のメンバー。

1997年没 64才

（ 高坂正堯 1996年没 62才 「文明が衰亡するとき」「日本存亡のとき」 ）

1975年前後の日本経済

GDP 実質成長率	1966~1970	1970~1975	1976~1980	1980~84	85~90
	10%以上	10%以下	5%以下	3%以下	ブラザ合意
	GDP 世界第2位	73年オイルショック			バブル

1991年を最後に成長率は3%以下となり失われた30年を迎える

1975年は、経済から見れば日本没落の予兆は見受けられない。

1979年 「ジャパン アズ ナンバー1」

2012年前後の日本経済

GDP 実質成長率	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
	1,37	1,48	-1,22	-5,69	4,10	0,02	1,38

日本経済は停滞している

「日本の自殺」 要点

はじめに

トインビーは、人類の文明は 6000年の間、21の文明
ミノス、シュメール、マヤ、インド、シナ、シリア、ヒッタイト、
バビロニア、アンデス、メキシコ、ユカタン、エジプト、ヒンズー、
イラン、アラビア、ヘレニック、西欧、正教キリスト教、極東

20世紀に生き残っている文明 7つの「種」

西欧文明、近東における正教キリスト教世界、
ロシアにおける正教キリスト教世界の分枝、イスラム社会、
ヒンズー社会、シナにおける極東社会の本体、日本における極東社会
の分枝、

● 21の文明の栄枯盛衰の研究 一→ 日本社会の将来を占う

第1章 衰退のムード

あらゆる文明の破滅 ✕外からの攻撃、 ○内部からの社会的崩壊

いかにしてギリシャは衰退したか

ギリシャ没落の原因 プラトン

欲望の肥大化、悪平等主義、エゴイズムの氾濫

- 1、 民主主義 → 衆愚政治
- 2、 全ての市民 裁判官 日当要求 どんどん高くなる
- 3、 ディオベリア = 最低生活保障金 どんどん高くなる
- 4、 レジャー対策 競技会 演劇 入場料出す
- 5、 スタグフレーション 社会衰弱 生産性低下

エゴの氾濫と悪平等主義 民主主義 活力失う

エリートは大衆迎合 大衆は思考力低下社会は「自己決定能力」を喪失していく

いかにしてローマは滅亡したか

ローマ帝国 人口7千万 ローマ 100万~120万 「永遠の都」

ローマ没落の原因 聖グレゴリウス一世

人生は長く、幸福は続き、物質的な富があり、誕生の率は高く、永続的な平和の静けさがあった。ところが、その世界がそれ自体まだそのように栄えていた時、すでにそれはこの聖者たちの心の中では枯れていたのである。

- 1、労働を忘れ消費と娯楽へ
- 2、ローマ市の人口は膨張に次ぐ膨張
- 3、市民コミュニティ崩壊
- 4、市民の無産者パンを要求（シビル・ミニマム）
- 5、市民大衆 マス・レジャー対策 サークス（競技場、大浴場）
- 6、権利を要求 義務と責任を忘れる → 道徳的精神的退廃
- 7、スタグフレーション

第2章 巨大化した「世界国家」日本

日本 成長と繁栄の絶頂 1979年「ジャパン アズ ナンバー1」

「世界国家」となる 軍事力なしで、全世界と「点と線」つながる

急速な近代化、工業化、都市化では、産業文明の歴史上で日本が一番となる

巨大な世界国家となって登場すると同時に、没落への歴史過程に足を踏み入れた

1973年日経新聞トップ 「4－6月期はゼロ成長――2期連続の落ち込み」

第3章 カタストロフの可能性

- 1、資源・エネルギーの制約
- 2、環境コストの増大
- 3、労働力受給の逼迫 賃金コストの上昇（生産性向上を上回る上昇）
- 3、賃金と物価の悪循環

危機の本質 日本人の魂と社会の深部にある

例 1、： 国鉄の組織の荒廃 ダイヤの乱れ、事故の増大

例 2、： 子捨て、子殺しの多発

例 3、： 政党間の「福祉コンクール」、減税競争

第4章 豊かさの代償

没落の原因は、資源問題などの客観的、外部的、物質的制約条件ではなく

日本社会の内部的、主体的、精神的、社会的条件のなかにある

没落の危険は、この危機や試練を正確に認識する能力を失いつつあること

危機や試練に挑戦しようという創造性と建設的思考の衰弱

部分を見て全体を見ることができない

短期なことしか考えず、長期の未来を考えることができない

これらの「内部の敵」は、近代化、工業化100年、敗戦後の30年をかけて
徐々に育まれてきた。

「保守か革新か」「体制か反体制か」「福祉国家か社会主義か」ではない

文明の転換と再生への飛躍の問題

豊かさや福祉、自由、平和、平等・・・ → マイナスの副作用

福祉国家 → 人間と社会 墮落へ 自由 → 無秩序と放縦

民主主義 → 衆愚社会と全体主義

東洋の涅槃教 功德天と暗闇天は姉妹である

第5章 幼稚化と野蛮化のメカニズム

ローマの野蛮化 5世紀

蛮族の服装と風習に対する熱中 大衆迎合主義

日本 無差別時限爆弾によるビル破壊 ハイジャック 内ゲバ

オルテガ「大衆の叛逆」1930年

大衆社会化 → 思考力、判断力の衰弱と幼稚化

ホイジンガー「朝の影のなかに」1935年

子供を大人に引き上げず、逆に子供の行動に合わせる社会

感情の欠落、 他人を尊重する配慮の欠如

個人の尊厳の無視 自分自身に対する過大な関心

判断力と批判意欲の衰弱

高度現代文明の産物 判断力の衰弱と幼稚化傾向

第6章 情報汚染の拡大

例 昭和47年1972年 練馬区石神井南中学校

光化学スモック集団被害 6回 全身に症状が起きた

原因 恐怖感と集団心理が作用した心因性 光化学スモッグではない

集団ヒステリー

非科学的センセーショナルな情報の氾濫による情報汚染

例 昭和48年 トイレットペーパー物不足騒動

昭和48年 原子力船「むつ」 放射線もれと放射能もれ

デマゴーグ ギリシャの指導者の意味が変じた

スターリン、ヒトラー、政治運動、大衆運動、市民運動のリーダー

マスコミへの依存大 個人の直接体験の比重が小さくなる

経験世界の内容 希薄化、断片化、 → 騙され、地力低下、真実？

テレビの影響

想像力、創造性の衰弱

各種の不適応神経症状

情報使い捨て 健忘症

論理的思考能力が失せ、たれ流し

異常事件に関する情報ばかり

第7章 自殺のイデオロギー

平等主義のイデオロギー

エントロピーの増大の法則

入り混じりながら均質化へ

誤れる民主教育

日教組 差別反対、人間平等 → 画一主義、均質化

成績をつけない 運動会で1、2等などつけない 学校群制度

真の民主主義

多元主義の承認 権利だけではなく義務と責任の存在

批判と反対だけでなく建設的提案

エリートを否定するのではなく重い責任を負わす

全ての社会問題、政治問題の解決にはコストがかかる

エピローグ 歴史の教訓

トインビー 「試練に立つ文明」

未来の歴史かは我々よりも現代を遙に正しい釣り合いを持って眺める
ことができるだろう「水底の緩やかな動き」を見失いがち

● 時間の遠近法に照らして全体像を把握しようという努力を怠ってはならない。

- 第一の教訓 国民が自らのエゴを自制することを忘れる時、経済社会は自壊して行く
消費者、勤労者、政治家、経営者、自己抑制しつつ調和点を見つける
- 第二の教訓 国際的にせよ、国内的にせよ、国民が自らのことは自らの力で解決する
という自律の精神と気概を失うとき、国家社会は松棒するしかない
- 第三の教訓 エリートが精神の貴族主義を失って大衆迎合主義に走るとき、国は滅ぶ
- 第四の教訓 年上の世代は、いたずらに年下の世代に媚び諂ってはならない
- 第五の教訓 人間の幸福は、決して賃金の額や、物量の豊富さなどによるものではない

2012年 3月「預言の書 日本の自殺 再考」 文藝春秋

2011年 東北大震災・原発事故
民主党政権下

2012年12月 第二次安倍政権

2023年 1月 「日本の自殺を読み直す」 佐伯啓思

大半の日本人 「日本の没落」「日本の一人負け」を感じている

どうしてなのか？ 「文明論」が欠如している

人口減少か、グローバリズムと情報化に遅れたか、改革の遅れか
財政赤字が問題なのか、イノベーションの遅れか、政府の失政か、
企業家の意識が低いからか、古い習慣のせい、中国が悪いのか

「日本の自殺」 著者たちの立場

保守的自由主義 左翼主義・進歩主義に対する批判 痛烈

敵対イデオロギーではない

「文明論」 文明衰退の歴史法則

今の日本はどうか 「衰退の様相」は、深化し鮮明となっている

人口減少・高齢化 → 社会の活力を奪う

経済の拡大は期待できない 消費需要の低迷 企業家の投資意欲？

経済の長期低迷

「日本復活」の楽観派 AI、ロボット、生命科学、環境テクノロジー

全体として、雇用の縮小、労働時間の短縮 → マクロの消費需要伸びず

世界情勢の不安定化 → 資源エネルギー不足、食糧不足 政治無策

戦後日本の「平和と繁栄」 日米安保体制のもと経済成長路線

「成長経済」と「平等社会」は永遠に続くと考えた

冷戦後の世界は亀裂 アメリカの覇権？イスラム、中国、ロシア、

「力の政治」へ イラン、北朝鮮、グローバルサウス

日本の対応 世界の構造変化やグローバリズムの矛盾に対する

意思や戦略がない

日本の国家が何を指すのかという国家像についての

自立した国の意思も国民的議論もほとんどない

政治の争点 安倍政権時 「モリカケ問題」「桜を見る会」

岸田政権 「統一教会問題」

● 政治の自滅のサンプル

近代の先進国の中で 「下り坂」に直面するのは日本が初めて

戦後民主主義 政権批判こそが民主主義

個人主義はエゴイズムへ

国家に求める シビル・ミニマム、ベーシック・インカム

情報化 スマホ、SNS など 過剰情報 フェイクの常態化

西欧近代文明 → 世界を飲み込む → グローバリズム → ほころび

市場競争 → 地球環境への負荷 民主政治 → うまく機能せず

アメリカ → 社会の分断 イスラム主義者 → 西欧攻撃

中国 → 覇権露わ ロシア → ウクライナ

西欧近代の価値失墜 自由な市場競争 民主主義政治 法の支配

「現代文明の没落」の最新国として

日本の責任は、 多様な文化、多元性を確保すること